

“神聖病について”

Hippocrates (5世紀, BC):

神聖病

ヒポクラテス全集, 第33編。

[Hermet Heintel: Quellen zur Geschichte der Epilepsie, Huber, Bern, 1975, pp. 11-17より]

訳: 福島 裕 (弘前大学医学部神経精神医学教室教授)

“神聖病”が、ヒポクラテス全集の中で、てんかんを表す病名として出てくることは周知のところである。ヒポクラテス全集は全73巻、58編にもものぼる膨大な記録であるが、それらの全てがヒポクラテスの手によって記された訳ではないことは、今日、定説となっている。つまり、西暦前3世紀頃に、アレキサンドリヤの学者達によって編纂されたともいわれている。しかし、そのうち、第33編「神聖病」はヒポクラテス自身によって記されたものと信じられている。

ヒポクラテス全集については、今裕博士の有名な翻訳書があり、また、神聖病の編などについては大橋博司先生やその他の人の和訳が著されている。ここでは、Heintelの *Quellen zur Geschichte der Epilepsie* にある独訳文から訳出することとし、とくに、第1章～3章の神聖病という呼名の由来、てんかんの遺伝についての記載の部分のみを記載することにした。

因に、古代ギリシャは、7人のヒポクラテスという医師がいたことが知られているという。そのような訳で、この有名なヒポクラテスはとくに「コス島のヒポクラテス」と呼ばれている。コス島はエーゲ海の島であり、そこに医神アスクレピオスの大神殿があり、古代ギリシャ医学の中心地の一つであった。

第1章, 1—12. 世に謂う神聖病なるものは、次のようなものである。つまり、(そのように称されてはいるが、)その発症の原因は、他の病気と同様、自然の機序によるのであって、それが他の病気とくらべて、より神的であるとか、より神聖であると見做されるべき根拠は何もないと考えられる。人々は、この病気があまりにも他の病気と異なっているために、驚き、困惑してしまい、それを神的なものと考えようになるのである。そして、これを[病気であると]認めることに当惑し、この病気が神聖な性質のものであるという考えを捨てきれないのである。しかし、治療が容易なものであれば、神聖なものとは考えられなくなる。というのも、贖罪とか呪文で治るからである。この病気が、不可思議な性質をもつが故に、神聖であるとされるのであれば、同じ理由から神聖病とされなければならない病気が他にも数多くある。神聖であるなどとは誰も考えるものもないような病気の中にも、これにおとらず奇妙、不可思議な病気がある。それには、次のようなものが挙げられよう。例えば、まず、毎日熱、三日熱、四日熱(マラリヤ)といった病気は、その不思議さにおいて、この病におとらず神聖であり、神事に由来するごとく思うえる。しかし、これらの病気が神聖なものではないかと訝がるものは誰もいない。また、一方では、何らはっきりした理由もなしに荒れ狂ったり、正気を失ったりする人が

あるのを私は知っているし、また、彼らの行う数々の馬鹿げた行動を見ている。また、睡眠中に呻いたり、叫んだりするものを多く知っている。あるいは、また、うなされたり、ベッドから飛び出し、戸外に逃げ出し、はっきり目覚めるまで正気に戻らないもののあることも知っている。このような人は目覚めてしまえば、前と同じように、元気になり、理性を取り戻す、もちろん、正気に戻っても、蒼ざめ、元気がないのはやむを得ない。このような症状は一度ならず、何回も起る。その他にも、さまざまな現象が数多くみられるけれども、それらの一つ一つを挙げて、枚挙にいとまがないほどである。そもそも、私はこの病をさして、神聖病などと言い出した輩は、すべて、今でもみられる呪術師、祈禱師、乞食坊主、ほら吹き、といった類の、いわば敬虔さと物識り振りをよそわなければならぬ連中であつたものと考え。こういう連中は病人を助けることが出来ないため、途方にくれたあげく、また、自らの無知をかくすために、この病が神聖であると言い出したのである。こうして、辻つまを合せながら、自らの治療の正当化を計つたのである。

第2章4—第3章1. この病は、他の病気と同じく、その発症において遺伝が関係する。何故なら、粘液質の親からは粘液質の子供が、胆汁質の親からは胆汁質の子供が生まれ、また、肺癆病者からは肺癆病の子供が、脾病の親からは脾病の子供が生れるとすれば、父か母かがこの病にかかっていた場合、その子供の中に親と同じ病にかかるものがあるとしても何の不思議もなからう。しかも、遺伝の種（たね）は両親の身体のあらゆる部分からもたらされる。健康な部分からは健康な種が、病める部分からは病的な種が子供に伝えられるのである。！ 体質という観点から見ると、粘液質者はこの病にかかるが、胆汁質者はこれにかからない。つまり、もし、この病が他の諸々の病気よりも神的なものであるとすれば、この病は均等に生ずる筈であり、胆汁者と粘液者との間で、その発生において、いささかの差もある筈はない。だが、この病が遺伝するものであるとはいえ、本病は、他の極めて悪質な疾病の場合と同じく、その真の原因は脳に存在するのである。

〔略〕